田舍の病院より

水野仙子

代々木の先生。

もう年の暮れでございますね。しかしこゝにゐてはちつともそんな氣がいたしません。たゞ僅に新聞によつてそれを承知させられるだけの事で、あの否應なしに迫つてくる年の暮れの氣分を、今年は記憶で味はつて居ります。年が暮れるといふ事も病人にとつては一向直接な事のやうにも思はれません。たゞ若し、月日さへ經てば快くなり得ると信じられるならば、一日〳〵其望みに近づくといふ意味で、年を迎へるのは私に嬉しうございます。

先生。恐らく私は先生に今まで手紙らしい手紙を書いた事がございませんでしたね。めつたに先生の門を叩く事もなく、懷舊の懷しさを餘外にしては常に遠く〳〵先生を離れて過しました。さうしてもう五六年は經ちます。此間お手紙で私の容態を氣遣つて下すつた時、私は嬉しうございました。さうして其中で、私が「懊惱してゐる樣が目に見える」と仰言つて下すつて事に對し、こゝでの生活をお知らせしたいといふ輕い義務……といふのも八ケ間敷い言葉だけれど、とにかくお知らせしよう〳〵と思ひながら、そんな事ですら病人にとつては一つの仕事なものですから、つい今までそれを果し得ませんでした。

かうして書きかけて見たところで或はまた途中でむしつてしまふやうな事になるのかも知れませんが、「あまりに疲れるのが早く、丁度燃えたと思ふ間に消えてしまふマツチの焙のやうに、憐れな燃えがらのみがさびしく殘ります」ともかく今は勇しく仰向になつた胸の上でこれを書いて居ます。若し書き了せたら、それだけ私の體力が恢復し得た事を證明するの喜びにもなります。

頭だけはいつもはつきりしてるやうに思はれますが、併しそれは却て病氣にはあらずもがなですの、どうかして虫のやうにうじ〳〵としてゐたいと思ひますけれど、そんな事を思へば思ふ程神經が鋭くなつてまゐります。さうして自分で自分を加減するのに又一骨折り折なければなりません。それでも私はまだ割合に落着いて居ると自分では思つて居ますかうしてこの病室の天井をまじ〳〵と眺める事にも、別に何等の感じも……抱かなくなりました。まして天井板それ自身が、どうして苦痛や焦

慮の情意を現はす事が出來ませう。

病室は八疊の日本間で、それに一間の床と押入れがついて居り、丁度東京の郊外で三間八九圓といふ位の家の座敷に相當するやうな部屋でございます。木口の新しくかなりお粗末なところも、どうやら新開地の貸家らしい感じがいたします。それも其筈此一棟は近年の増設になつたもので、この町でたつた一つの病院は地續きの畑地や林を切り拂つては年々その病室を増して行かなければならないやうな状態になつて居るのです。殊に今年は病院が繁昌のやうに見えます。私が入院した當時の九月などは、どの病室も滿員も滿員、眼科の患者なぞは一つの室に五六人も入つて、丁度田舎の湯治場の相客のやうにゴロ〳〵寢てゐるのを見受けました。入院患者のざつと半分は近在の村人なので、其朴訥な調子を漂はす氣分は、東京あたりの病院と大分趣を異にしてゐます。第一に知るも知らぬも廊下での出會ひや、病室の前の通りすがりなぞに、敬意の籠つたやうなお辭儀を交す事で、ちらりと流し目で隣りを見て通るやうな、よくいへば煩さくない關係に馴れてゐた私は、初めのうち大分面喰ひました。かと思ふと、診察室のドアを開けて、「今日は、お天氣でようございます。」などゝぴよこ／〳〵頭を下げて思はずお醫者さんや看護婦達を微笑ませてゐるお婆さんも見受けられます。

いよ〳〵私が入院するといふ事になつた日、家の者が整へる用意を見て私は驚いて笑ひました。粥鍋や茶碗箸は云ふに及ばず、小火鉢、ちやぶだい、バケツだの小桶だのと、一寸一通りの世帶道具といってもいゝやうなものを店の小僧が荷車につけて運んだものです。成程來てみればやはりそれらは不必要なものでもありませんでした。殊にこの入院を半永住的のものに考へる時には……。賄ひの食事の外に氣に入つたものでもこしらへようといふのですから、書生の自炊生活よりはよつぽど上等でございます。水道がない爲めに、定つて小使が汲み込む使用水では間に合ず、各部屋一つづゝのバケツや手桶を置いて、それを廊下に並べて置くのなぞも、田舎の病院でなければ見られぬ趣きでせう。

總じてまだ〳〵人々が質朴なのは何より快い暢氣な氣分を與へますいつぞやはる〴〵私を見舞つてくれた人がそれを言つて笑つてゐました其人は此邊の旅行は初めてゞあつたの

で、隣合せた田舎人に此町の驛名を言つて聞くと、自分も其處に降りるのだからといふ事で、それからそれへと病院に人を訪ねる事などを聞き出し、先に立つて停車場に降りたつと、車を呼ばうとした其人を慌てゝ控へて、「なアに車に乘るがもんはねえ、それ其處に見えんのが病院でごつさ。」と前方の暗い高見にちら〳〵してゐる灯を指さし、袖を引張るやうにして寄つて來た車夫の間を通り抜け、さうして聲高に町の話などをしながら、其人を病院の前まで連れて來て、自分はこゝから二里ばかり離れてゐるといふ村の方へ歸つて行つたとの話です。

かうした人々の心の如くに、自然も亦虚飾のない風景をもつてこの病院を包んで居ります。かの村人が指さしたやうに建物は川岸の高見に聳え、私達の病室は一連の硝子窓をもつて、作意のない暢々した眺めと、自由な空氣とを迎へて居ります。その眺めは、初め——私が此院に入つた當時は、遠くも近くも一面光澤をもつた緑の世界で、鏡の樣に澄んでゐる水の面も深碧に、今そこに痩て頭の見える半鐘も、樹立の繁りに其脚を蔽はれて若い姿をして居りました。雄々しい靜かさに於て吾々に面を向けて居る連山、さうして朝まだきから人家の目覺めを告げてのぼる三つの煙り——其一つは板切り工場から、も一つは瓦燒場から、さうしても一つの煙りは停車場から——それらはついに私をして「おゝ山よ、おゝ河よ！」と何とはなしに呼びかけさせないでは置かないのでした。さうして其心の底に漲る思ひは、山と野と人里とに向ひ、「お前を見れば、私はやつぱり死にたくない！」とでもいふやうに。間もなく冬は遠慮もなく野や山の緑を刈り込んで、坊主になつた小丘のかげを走る汽車の足が輕さうに見えます。田は雪の褥となる前の休息にさびれ、森は愈〳〵その黒い凝集を固うしてゐます。気候は今までのところ東京邊とあまり大した違ひはなく、ともかく一度降つた雪に折角威容を整へた連山も、今は僅かに其頂上に白いものを見せてゐるだけで、またの雪が來るまでは此まゝ穩かで居りませう。

夕暮れ、若し熱のなかつた場合には、私は起き上つて注意深く着込みながら、その窓に倚つて雲を眺めるのを好みます。それは、其日〳〵の仕事に追はれて地上を這ひ廻る蟻のやうに上を向く機會のない都會の生活では、到底思ひもうける事の出來

ない美しさと面白さを持つて居ります。さうしてそれは筆紙に盡し難い程微妙で崇嚴です。たゞ私はひとりでそれを感嘆し賛美する。折から半面の山々に彩られて、殘つた雪の襞が黄金蛇のやうに輝く。その山の反映がまた遠く相對峙した東の連山の一部に投げられて、田圃中に建つてゐる村の小學校の白壁を一際白くさせる、夕闇は刻々進んで來る。さうしてついに山か雲かの境が朧になりかけた時、落伍か或は先驅か森を超えて烏が一羽、ゆるやかに併しながら急いで塒をさして歸つて來る。と思ふ間に一羽二羽、おゝ〳〵森が魔法でも使つたやうに、突然幾百と知れぬ一群れの烏が、見る〳〵うちに空にひろがつて、或はカア〳〵友を呼び交し、或は挨拶をする如くに啼いて、途中から少しく方向をかへるのも見える。その羽音は窓に倚つて仰いでゐる私の頭上を越して、一頻りは小止みもなく點々たる飛翔がつゞく。空が再びもとの廣濶にかへると、氣づかぬ程に増してゐる薄闇の中に、私は猶も遠く其眼を雲の中にそゝぎます。夕日は既に沈んで、薄明の空に山々は僅にその色の濃さに於て見分けられる時、無から有に、ぽつちりと一つの黒星が點じられ、それが見る間に鳥の姿となると、其處ら一面に黒ゴマを散らしたやうに見えるものが凝視に從つて烏の一群となり、さうしてそれがまた私の頭上を掠めて毎夕定つた方面へと歸つて行きます。それは日が暮れかけてから暮れきるまでの間に幾群となく續けられます。猶私はよく朝の寢床で朗かな彼等の啼聲を聞き、彼等の樂げな旅行を想像して、早く起き出た少女に、「烏が行くかい？」と尋ねます。「えゝ、あれ〳〵あんなにいつぱい！」と彼女は箒の手をとめて暫らく其處に立つ。やがて輝ける朝の雲が、虹のやうに硝子窓を染めて、病める者の床にもその幸福な光を齎して來る……。

けれども冬の夜は長うムいます。殊に夕餉を早くすまして了ふ患者達は、一際早く夜となる病院の靜かさの中に、漸くはつきりして來る川下の水車の哀音に耳を傾け、さうして隣の寺から眠れよと鳴り出す九時の鐘を聞く頃まで、夜永のつれ〴〵にその惱める體をもちあぐみます。かうした場合私は此頃少しは讀書が出來るやうになりました。殊に好んでトルスドイのものを讀んでゐますさうして今私はあのおぢいさんを愛してゐます。全く一言のAberなしに。

こんなに自分に肯定されるところもされないところも、つつくるめて一作者を愛敬するといふことは、私の今までに嘗てない事でした。私は今、人としてのおぢいさんを愛して尊敬してゐるのです。さうして決して借り物ではないところの念をもつて！

今、夜は靜かに更けて行く。トルストイのおぢいさんは床の柱にその大きな兩手を組んで、怖い、けれども優しい目で、無精にも寢ながらペンを動かしてゐる私を見まもつてゐます。この肖像と、靜かなミレエの羊飼ひの繪とが、この移住的な私の部屋のたゞ一つの裝飾であり慰めであります。

私を看護してゐる少女は、いつの間にか火鉢に依りかゝつてかすかに健かな鼾をたてゝ居ます。でも私はまだ病氣を得てから其後の心持ちに就て先生に語る事を殘して居るそれだのに私も今は疲れました。若し私の體力さへそれを許すならば、明日またこの先をつゞけることにいたしませう……。（未完）

入力者注：
底本は総ルビですが、ふり仮名は一部のみ残しました。
以下の修正を行いました。
「ませう、」→「ませう。」

底本：讀賣新聞　大正五(1916)年十二月二十四日朝刊
テキスト入力：小林　徹
公開：平成二十九年十一月三日
最終改訂：令和五年五月十五日
リンク：水野仙子ホームページ